
子ども以上人未満

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子ども以上人未満

【Nコード】

N43020

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

さらっと読める。

なんか頭に残る。

そういう小説を書いています。

これは2作品目。一日一作。少しずつ。歩みをとめないで。

「ハッピーバースデー・トゥー・ユウウウ」

深夜3時までやっているレストラン。時間は夜の10時を回っている。男は、薄暗いレストランの中、目の前のケーキのろうそくを吹き消した。

「おっ、一回で消せたね。おめでとう！これでようやく公にお酒も飲めるね。って、もう呑んでるか。」

葵はそういつて笑った。笑いえくぼが出ている。本人曰く、チャームポイントらしい。

バーバリーの黒のキャミに、バーバリーチェックが縁取られたアンサンブル。胸元には、ブルガリのネックレスが光っている。男がこの間の記念日に買った奴だった。つきあって1周年の記念日にとネットオークションで買った。男にとっては高額の1万2千円。本物が偽物かは関係ない。ブルガリであることが大事だった。来月からバイトを増やさなくてはならない。

「じゃあ、真一の20歳の誕生日に乾杯！」

チンツ。ビアグラスの音がレストランの中に響いた。

男は、なんだか乾いた音だな、と思った。

「ねえねえ、このケーキ、気に入ってくれた？ここのシェフに無理言って作ってもらったんだ。この上のチョコ、これねゴディバなの！すごいでしょ〜！」

葵は矢継ぎ早に話を進める。

まだ食べてもいないのに、気に入るクソもあるか、男は思ったが口に出たのは違う言葉だった。

「うん、すごいね！ゴディバって高い奴でしょ？楽しみだなく食べるのがもつたいないくらい！」

自分でも嫌になる。なぜ、俺はこうなんだろう？

周りに流される自分の性格がイヤになる。

「でね、そいつが最悪でさ。あつたまくるのよね〜マジしねって感じなの。」

葵はビールを呑みながら会社のグチを言っている。ケーキは食事の後にしたので、下げてもらった。

キツイ、給料が低い、職場の人間がキモイの葵なりの3kの会社らしい。グチは尽きない。

「それは、辛いね。でも、葵もよくがんばってるよね。」
男は優しい目で励ます。心にも無いことをいいながら。

男は子どもの時からそうだった。人の言われることをそのまま鵜呑みにして、周りの事を気にして平穩に事を進める。進学も恋愛も人に任せっきり。

友人誘いで参加した合コンも、その合コンの帰りに葵に誘われて抜け出したのも、そのままホテルに行ったのも、全て周りに流されてのことだった。

「いや、ごめんね開始が遅くなっちゃって。どうしても仕事抜けれ

なくてさ。お腹空いたね。ご飯にしよう。」

葵は某お菓子会社に勤めているOLだった。真一よりは5歳も年上になる。つきあって1年2ヶ月ほどになるが、ケンカもなく平穩に過ごしてきたといえる。(葵の方は物足りなく火遊びも多いようだが)

「いいんだよ。誕生日は明日だし。後たった1時間だし。」
男は言った。

「お腹ペコペコ。ここはコース料理で、メインを選べるのよ。魚か肉。ボーイさん、今日のメインは？」

ボーイがすました顔で答える。

「今日は肉料理はイベリコ豚マスタードソースがけ、魚料理はスズキのパイ包み焼きです。」

「うわ〜イベリコ豚おいしそう！じゃあ、私は肉メインで。真一は魚でいいよね？」

「うん、いいよ。」

本当は豚が食べたかった。魚はあんまり好きじゃない。

「真一は、いつも私のわがまま聞いてくれるんだね。」

「そうかな？僕はいつも自分のしたいようにしているだけなんだけどな。」

「そうなの？それじゃあ、私たちはやっぱりナイスカップルなんだね。そんな真一に20歳のプレゼントをあげちゃおうかな〜」

ハイッ

手のひら大のハコを開けると、そこにはゴツゴツとした髑髏の形の
ネックレスが入っていた。

「これは？」

「クロムハーツ！高かったんだから」

葵は嬉しそうに言う。

男はおそろおそろつけてみる。黒ヒモでワイルドな感じのするシル
バー。マツチヨなタフガイにはピッタリだろう。

いかんせん、男は華奢すぎた。

自分でも似合わないと思いつける。

「うわー、似合う似合う！そういうのしてる男ってかっこいいよね
」

葵はご満悦だ。流行り物が好きなギャルっぽい葵だけの着せ替え人
形なんだろう。

男は窓ガラスに映った自分の姿を見た。貧相な笑顔に、髑髏が笑っ
ている。

「もっともつとかつこよくなつてね。」

葵の声が遠くで響いた。

子どもの頃夢見た20歳。大人のイメージだけがあった。自分で生
きている、自立している大人。

窓ガラスの自分は、いったい誰なんだろう？
いったい何がしたいんだろう？

「でも、何もする勇気がないんだろう？」

髑髏が言った。

「だって、何もしなければみんな笑顔なんだ。」

男は言い返す。

「笑顔なら幸せなのか？」

髑髏は言う。

「幸せだよ。」

男は言い返す。

「ならいい。」

髑髏が言う。

「仕方がないんだ。」

男は言い返す。

「20歳ってのは成人、人に成るって書くんだ。」

髑髏が言う。

「…僕は、なんだ？」

男は聞く。

「…」

髑髏は黙る。

「後5分で20歳だよ！」

葵が言った。笑いえくぼが見えた。腹が立った。

「…そうだね。」

男は言った。

「じゃあ、もう一回乾杯しよう。お酒なくなっちゃった。ビールでいいよね？ボーイさん」

「…いや、ちょっと待って。」

ボーイにピースをして、ビールを2つ頼もうとしていた葵が振り向いた。

「え〜ビールでいいじゃん。乾杯って言ったらビールでしょ？」

「…実はあんまりお酒は好きじゃないんだ。ペリエをください。」

「ペリエってお酒じゃないよ。」

「知ってるよ。僕はペリエが好きなんだ。」

僕は、人に成らなくてはならない。

20歳まで後47秒しかないけど。

(後書き)

また明日も一作載せます。

少しでもご感想いただけたらと思います。

本気で書くつもりだと思ってますので、どんな感想も飲み込むつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4302o/>

子ども以上人未満

2010年10月21日10時28分発行